
名探偵宮首 学校

雪笛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵宮首 学校

【ZPDF】

Z9136Z

【作者名】

雪笛

【あらすじ】

宮首が学校で発生した事件の解決に挑む。

汗だくになりながら僕は大慌てで教室に入った。

教師にどう弁解しようかと走りながら必死に考えていたのだが、その考えは無駄となつた。なぜなら、教室には生徒が誰一人いなかつたからだ。

「おい蒼紫なにやつてんだ。今日は8時30分から体育館で朝会だぞ。戸締まりするから早くでてくれ」と言つのは、僕のクラスの学級委員長である山村大輔やまむらだいすけだ。

「ああ、そうか」

昨日の帰りのホームルームで教師がそのようなことをいつていたのを思い出した。

「やうだよ。だから早く出でくれ、鍵を閉めるから」

僕は一言謝り、自分の席に荷物を置いて、教室を出た。僕が教室を出ると、山村が鍵を閉めた。

「これで良しと、それじゃあ行くか蒼紫」

僕は山村と一緒に体育館に向かった。

体育館に着くと、ちょうど朝会が始まるといった。僕は急いで自分のクラスの場所へ向かった。

まだ生徒たちがざわついていたが、朝会の司会を任せられている教師が一喝すると、やつきまでの状態が嘘のように静まりかえった。司会の教師は満足した表情を浮かべ、朝会を始めた。

朝会は三十分ほどで終わった。内容はほとんどが校長のつまらない話だった。僕はほとんど校長の話は聞かず、時計を見ながらいつ朝会が終わるかばかりを考えていた。

僕が教室に帰ると、まだ教室の鍵が閉まっていた。

「ああごめん宮首君」と言って、鍵を開けたのは、僕のクラスの学級委員長の平井詩織ひらいしおりだ。

「あれ？ 鍵は山村が持ってるんじゃないの」

「山村君、朝会の前に先生に用事を頼まれたから、私が預かったの」

「そういうことか」

僕は納得して、教室に入った。

事件は僕が教室に入つてすぐに起きた。

「なによこれ！」

と大声で言つたのは、国見麗子くにみれいこだ。

国見は自分の席を指さしている。僕は国見の机を見た。

国見麗子は犯罪者だ！

机にはそう刻まれていた。

「誰がやつたのよ！」

国見は怒りをあらわにしている。

周りの生徒達は騒然としている。

「おーおー、久しぶりに学校に来てみたら何の騒ぎだ

「三浦ー。」

「おお蒼紫、一週間ぶりだな。インフルエンザはこの通り、すっかり治ったよ」と言って、三浦は大げさなアクションで胸を張った。

「ところで、何かあつたみたいだが」

「ああそれが……」

「私の机に誰かがひびこりこをしたのよ」

僕が説明しようとしたのを遮って、国見が言った。

それを聞くと、三浦はしばらく国見の机を観察した。

「なるほど。この文字は何か鋭利な物で刻まれたみたいだな。しかし、国見は犯罪者だつて書かれてるけど、そつなのか国見？」

「そんなわけないでしょー。誰がやつたのよ。今なら許してあげるから、今乗つ出なやー。」

「[冗談だよ国見。そんなに怒るなつて」

三浦以外に国見の問いかに答える者はいなかつた。

「国見やー。」

「何よ国見やー。」

「おかしくないかな?」

「何がおかしいのよ?」

「朝会が終わつて平井さんが来るまで、この教室には鍵がかけられていたんだよ」

「それがどうしたのよ」

「僕は最後にこの教室に入つたんだけど、そのときそんな文字はなかった。僕の席は国見の斜め前だから、もしそんな大きな文字が書いてあつたら、嫌でも目に入る。つまり、犯行は朝会の間に行われたことになる。でも、僕がこの教室を出るとき、僕は山村が戸締まりするのをはつきり見た。だから朝会の間は誰も教室には入ることができないんだよ」

「だつたら、誰がどうやってやつたってこいつの？」

「それはわからない」

一体犯人はどうやって鍵の閉まつた教室に入つたんだろう。扉はもちろん窓の鍵もしつかり閉まつていて、一昔前の窓の鍵ならば、左右の窓を交互に揺らすことで振動が起こり、簡単に鍵を開けることができたが、この間の改修工事で鍵は最新の物になり、簡単には開けることができなくなっている。

「朝会の間は誰が教室の鍵を持つてたんだ？」
隣でさつきまで黙つていた三浦が言つた。

「あつそれは私。朝会の前に山村君に渡されたの」

「鍵はずつと平井が持つてたのか？」

「うん。誰にも渡してないわ」

「思い出した！」
突然国見が言った。

「犯人はあんたね詩織。確かに朝会のとき、あんたトイレに行くとか
言って、体育館を出たわよね。そのときにやったんだわ」

「そんな、私やつてないわ

「嘘を言つても無駄よ。教室の鍵を持つてたのはあんたなんだから、
あんたが犯人としか考えられないのよ」

「ちょっと待つて国見さん。平井さんには無理だよ」

「なんだよ」

「「」の教室から体育館までは、どんなに急いでも3、4分はかかる
んだ。だから往復すれば7、8分はかかる。けど、平井さんが体育
館を出ていたのは5分ぐらいだった。その間に体育館から教室まで
行って、机に文字を刻み、そして体育館に帰つてくるのは無理だと
思う」「う

「なんであんたが詩織が体育館を出てたのが5分ぐらいだつてわかるのよ」

「校長の話がおもしろくなかったから、僕はずつと時計を見て考え事をしてたんだよ。だから平井さんが体育館を出ていた時間がだいたいわかるんだ」

「なら誰がやつたっていつのよー」

「それは……」

「わからないんでしょ。やっぱり犯人は詩織ね。あなたの詩織が体育館を出てたのが5分ぐらいっていつのよー」

「そんなことないよ僕は確かに……」

「残念だが蒼紫。お前の証言が正しいといつ根拠はない」

三浦が険しい顔で僕を見て言った。

「そういうことよ。覚悟しなさいよ詩織！　あたしにこんなことして、ただで済むと思わないでよ」

「そんな、私本当に……」

言葉を言い終える前に平井は教室を飛び出して行った。

「ふん。涙まで流して、~~お居~~が上手なのね」と言つと、国見は自分の席に座つた。

「」のままで平井が犯人にされてしまう。平井が犯人でないことは、僕自身が一番わかつている。でも真犯人は誰なんだ。それにどうやつて犯人は鍵の閉まつた教室に……わからない。とりあえず、自分の席に座つて考えるか。

僕は自分の席に座つたが、何か違和感を感じた。机が低くなつた気がする。確かもつと高かつたはずだ。でも確かにここは僕の席である。机の中身も僕の物だし……あれ？机の奥の方にプリントがあるな。僕はプリントを取り出した。これは！国見の英語の小テストのプリントだ。なんで国見のプリントが僕の机の中にあるんだ？

「おい、またお前俺の席に荷物置いてるじゃないか」

「ああ」めん。三日前に席替えしたばかりだから間違えちゃつて

隣の男子生徒一人の会話が聞こえてきた。席替え……そーか、そ

うこうことか！じゃあ、あそこにはあれがあるはずだ。僕は教壇に向かつた。

教壇の上には座席表が置かれていた。これで眞実は明らかになつた。犯人は だ！

「つたく、なんなんだいきなりクラスの旨を集めて」

「三浦君の言つ通りよ。一體何なのよ
国見の怒りはまだおさまっていない。

「まあまあ一人ともちょっと落ち着いてよ。実は、事件の犯人が分かつたんだよ」

「本当か蒼紫！」

「ああ、ホントだよ三浦」

「ちょっと待ちなさいよ！さっきの話で犯人は詩織としか考えられないことが分かつたはずでしょ！」

「確かに朝会の間、教室の鍵は閉められていたから、犯行が可能なのは鍵を持っていた平井さんだけだ。だけど、もし犯人が鍵を開ける必要がなかつたとしたらどうだい？」

「なにを言つてるんだ蒼紫？」

「つまり、犯人は鍵を開ける必要がなかつたんだよ」

「どういうことだ。まさか犯人は壁をすり抜けられるとか言いだすんじゃないだろうな」

「そんな非現実的なことは言わないよ」

「そんなことはいいから早く教えなさいよ！」

「犯人は教室の中にあらかじめ隠れていたんだ。おそらく掃除用具入れの中か、教壇の下にね」

「なるほどな。だが蒼紫、クラスの皆が教室から帰つてきたとき、

「ドアの鍵はしつかり閉まっていたんだよな。犯行を終えて、教室を出るとき、一体どうやって犯人は鍵を閉めたんだ？」

三浦は冷静に論理の穴を指摘する。

「鍵を閉める必要なんてなかつたんだよ三浦。犯人はずっと教室にいたんだから」

「何！ 一体どういうことだ」

「犯人はクラスの皆が帰つて来るまで、教室の中のどこかに隠れていたんだ。そして、どさくさにまぎれてクラスに溶け込んだ。それが可能だつたのは、クラスに一人だけ朝会が終わつた後に現れた人物である……三浦だ！」

「これは驚いた。確かに蒼紫の推理は筋は通つてゐる。だが、俺は遅れて來たが、それは寝坊したからだよ。それだけで俺がやつたというのは無理がないか」

「三浦が犯人だという根拠は他にもある」

「……他の根拠ってなんなんだ」「三浦の顔には焦りがみえる。

「実はさっき僕の机を調べたら、机の高さが違つてたんだ。それに、中から国見さんのテストが出てきたんだ」

「えっ！ 何で私の手紙が」

「そして、国見さんの机を調べたら、高さが僕の机と同じで僕の机にあつた傷もあつた。つまり、僕と国見さんの机が入れ替わっているんだ」

「えっ、でも何で？」

「それは、三浦が僕の席を国見さんの席だと思つていたからだよ」

「なんで三浦君はそんな間違いをしたの？」

「三浦は知らなかつたんだよ。一週間学校を休んでいたから、三日前に席替えがあつたことをね。もういいだろ三浦！ 正直に話してくれ」

三浦はまだなにか反論しようつと口を開いたが、なにも言わず視線を下に落とした。

「まさかこんなにも早く見破られるとは思わなかつたよ。冷静になつていれば、席替えがあつたことぐらいすぐにわかつたのにな」

「三浦らしくないミスだね。冷静であれば席替えがあつたといつことはわかつたはずだ……何でこんなことをしたんだ？」

しかし、三浦は視線を地面に落としたままで口を開くことはなかつた。

後日、三浦がなぜ国見に対してあのようなことをしたのかがわかつた。国見はある男に痴漢の冤罪事件を起こしていた。その男は、三浦の友人である大学生であつた。その事件はのちに冤罪だと判明したのだが、精神的に追い詰められていた三浦の友人は自殺した。遺族は国見や行政権に対して訴訟を起こそうとした。しかし、国見の父親は権力を持った人であつたため、圧力をかけてその事件を闇に葬つた。今回三浦があんな行動をとつたのは、国見にあの事件のことを思い出させるためだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9136n/>

名探偵宮首 学校

2010年10月11日21時45分発行